

「ヘーゲル『大論理学』（第二版）「定在」における無限論」

堀永 哲史（本学社会学研究科修士課程）

本発表ではヘーゲルの『大論理学』、有論（第二版）の定在章における無限を論じる（以下「無限論」と呼ぶ）。通例、無限を論じる際に主題となるのは、有限と無限の二者だけである。しかしヘーゲルは、たんに有限なものに対置されそれゆえ有限であるにすぎない無限なものを悪無限であるとし、さらにその悪無限から区別された真無限を導入する。ただただ悪無限を退ければよいのではなく、むしろ悪無限的な無限進行の最中にのみ真無限は把握されうる。その場合にのみ、真無限の二つの契機である有限なものと悪無限とは区別されながら真無限のうちに統一されていること、そして両契機が運動することで全体としての真無限もまた運動であることが正確に掴まれうる。

真無限を正確に把握する際に難所となるのは、無限進行から真無限への転換点である。この転換点を見極めるために注目するのは<在り方>である。つまりさしあたり各々<それだけで存立する>とされている有限なものや悪無限とが、ヘーゲルによる批判的叙述を経て、その真相においてどのような在り方をしているのかに注目する。

また本発表では冒頭で次の二つの問いを提起する。第一の問いは「有限なものほどどのようにして自己から外へ超え出て無限なものへと至るか」であり、第二の問いは「無限なものほどどのようにして自己から外へ超え出て有限なものへと至るか」である。第一の問いは、さしあたり有限なもののみがあるなかで無限なものへと至ろうとする際に生じる。しかし有限なものと無限なものとを隔絶させるかぎり、無限なものは有限なものにとって彼岸にとどまり続けるので、この問いに答えることはできない。第二の問いは無限性のなかに有限性の原理をどのように組み込むかという問題である。この問題は、ヘーゲルだけでなく、同時代のフィヒテやシェリングらにも共有されていた問題であった。しかしシェリングは無限なものから有限なものへの移行が一切の哲学の問題としながらも、この問題は解きえないものとした。これに対して、ヘーゲルはこの問いに回答を出す。ただしその回答の仕方は、この問いが持つ前提、すなわち有限なものと無限なものとを隔絶させ、各々をそれだけで存立するものと見なす前提が、無限なものを有限化してしまっていることを暴露し、問いそのものを否定するというようである。

真無限を把握することで明らかになることは、真無限にとって有限なものは存在しなくてもよいものではなく、むしろ真無限の契機として積極的な存在意義を持つことである。したがってヘーゲルの無限論を論じることによって、それだけではまだ不完全ではあるにせよ、われわれ人間を含む有限なものの存在の根拠を示すことができるだろう。

以上の論点を踏まえ、本発表ではヘーゲルの論述の順序に可能なかぎり従いながら、これまで論じられることの少なかった無限論の細部にまで立ち入り、真無限の正確な把握を試みる。